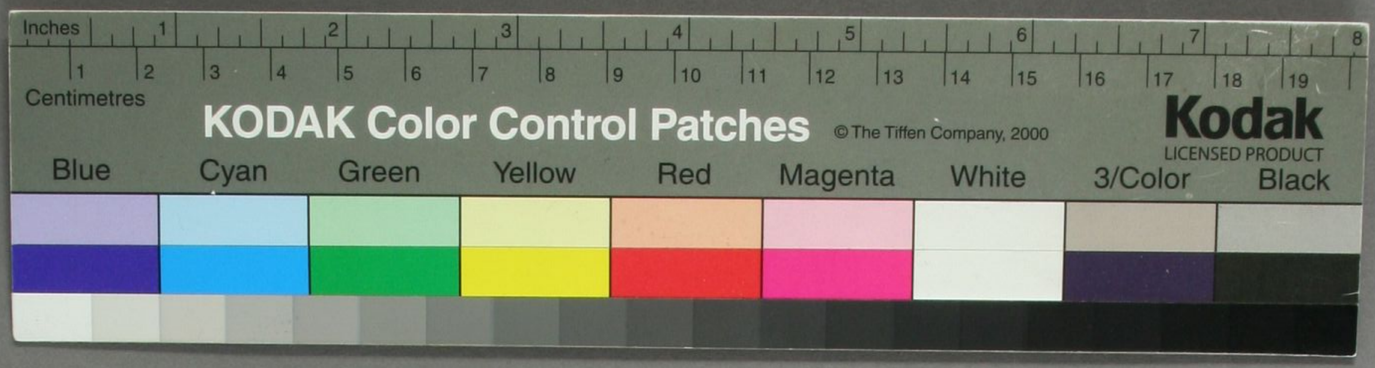

中村拯定文庫
文庫 18
505

三歌仙序詞

中村俊定文庫

[illegible]を摘[illegible]
[illegible]といひ[illegible]
巻[illegible]
[illegible]
[illegible]

さておろつく古し
うはとゝて言きる調ふおゝて角ふもハゝふ奴
白ゝや古調のまいんすありるいんハ彩うてし
見ゝ出三歌仙いろ脱鎧のはよあひて吉筆哉
今を新しまるをおくく木上ゝて同志ふ徇ゆへんと
暮雨巷暁堂亀ゝまをおぐさゝ兒ことゝ越きゝいふ

安永四未夏五月

貞享はゝ元の少ゝ遊ひくゝゆつふゝ春名ゝ

あそひまおゝ鮒釣りめて七里迄　芭蕉

旅亭桐葉のもとゝ
仏生て昭ゝまゝんとゝゝ

此浜ふ笠雛おゝん笠ゝ涙　芭蕉

むくも俺しまも　浪乃から橋　桐葉

風ふそ仇ふうとゝぬうゝて　東藤

尾張の國勢田よりかへりて
師走の海うんとそ初しぐれ

海こえて鴨の羽音や雪の上　芭蕉

雪に鶏鳴　あるじ　鯨　桐葉

二百年　氷山を斧とりて　東藤

櫓の拍子おくれ勝ちなる　工山

入月小鶏（イナカ）の多き　桐葉

雪なき国ぞ寒からぬ　芭蕉

隣雨を売る家毎の洞かな　工山

一翁咲て　苔薬乃窓　東藤

墓の立ぬ二日ともちる日をぬきて　芭蕉

国司帰ると狐ありくなり　桐葉

霊芝ほる河原遠き夢路　東藤

夢表よりけふも入　工山

竺奏して夜のやうやく　桐葉

秋のかぐれの人　芭蕉

をとひの聖ら社演を用ひて　　二山
志方の雪に詩を書捨て　　東藤
花曇る石の廊に押もる書　　桐葉
美人の船を浮むる汐干狩　　二山
蝦夷の聲おもしろく聴て　　芭蕉
生海鼠に筋八ツ割れたり　　東藤
木の芽ぐむ寺堂に墨の香　　二山
藪ふくとやの十ばかり日ぬ　　芭蕉

ほつ〳〵と地蜂作る袴文字　　東藤
京より嫁る——二十前の吹矢　　桐葉
不二の根と答ふる馬子ものどか　　芭蕉
霞より鶯の出ひびきあり　　二山
詩箋に清を志のひ薄紙ひ　　桐葉
夜のつく小性莊乃戸を押　　東藤
月朗く時雨の雲八ツ割て　　二山
榾を焼く消ふるの寒　　芭蕉

砂ふるう裏を國よおろす　東藤
高麗の駱駝に畠作らす事　桐葉
仁徳乃庾廩に栄の香を疑　芭蕉
ちひさき宮の　永き日乃伽　工山
春雨の彩霞を称美し来る　桐葉
春卿ちらん藤の撮影　東藤

何やらん一小行李一春卿
頻笑ーーこえて　芭蕉
田螺わる銭の音乃あるかふ　叩端
ゑぬる事　君ゑらん　桐葉
有明淋雪の最相の下踏すて　芭蕉
酒欲む婦乃いふ事ぬ　叩端
　　桐葉

双六のうつみを出でゝ
琴の爪をとむ
　　芭蕉
経をよむ袖の移香
　　叩端
野の宮のあるじ狼おどろかして
　　相笑
庵室にさる猿を聞寺の秋
　　蕉
蓑着をとゞめて泊る月の関
　　叩端
面白のおもかげの薄もや
　　相笑
姥捨を志のふ新四
　　芭蕉
　　叩端

川狩の磐を角ふ活らて
　　相笑
金剛ともおぼえ滝ふる
　　芭蕉
農原石の浄塵の苔久し
　　叩端
羽織よ酒ばかりかくる猿屋
　　相笑
寄らみゝ女よ禁ぬ松屋の
　　芭蕉
松屋の画ふすまうつみ
　　叩端
開なれ一箇の筆元社遠ざり
　　相笑
三ツ股のふもと深川乃巻
　　芭蕉

菴住やうり杜律を味ひて　叩端

芥逃ある伴　桐葉

ふる百舌鳥八雲を負ふし　芭蕉

ふ深む小道　叩端

月明く歩板山を見つゝん　桐葉

雲八表裏の路理む　芭蕉

むる面のそまを抜ける北嵩　叩端

もの亀の血簑ふ音　桐葉

笠ふ雪人八津まともまで　芭蕉

男やもめの売そうがま　桐葉

風ふまた大年の老の七つ　叩端

市門をもく生鯉の奏　芭蕉

老整山寺整く冬ふ　桐葉

寒小孫ふ連ふ哥帥乃松　叩端

右蕉翁真蹟有幕雨巻

淋しくも梢の花の袖ふるる　芭蕉
獨り茶摘つむ　蘇北一家　叩端
日影山雉子の飛をおそき事　芭蕉
淋しさを才子ふる栖杓に月　閑水
面白き歌書よむ窓のともし　東藤
蚊のうなりに拂ふを怪る　工山

表の裏に都の連歌出つけて　芭蕉
筆法大津三井の流れ　叩端
雪枝繪ふ漁火焼う袖を見る　工山
霜ふかき朝　鴨方　白石の宅
松風の餐ふ酒を絞つくし　桐果
ともけを列む雪谷の宿　閑水
鳥羽玉乃髪洗ひ髪ふ事て　東藤
夢をうつゝの魚の月　叩端
　　芭蕉

秋八月惟喬親王
白子の浜まで
護らる鷲の
降て松朝
笠持て
五重の塔
鶺鴒の尾
風小雪を
桐葉　叩端
工山　東藤
東藤　桂樹
桂樹　芭蕉
叩端　桐葉
芭蕉　工山
桐葉　東藤
工山　叩端

蟬吟る清水に沿ひ柿の秋の雲　芭蕉
草屋迄馬の尾の琴　工山
窓ちかく高物焼くや卯の花　東藤
入口の跡の星　桐葉
宮守や油さけつも栗の裏　芭蕉
波一つのすき間若葉雨　棟梅

神前の茶店まで
志のふかく枯るゝ錢買ふ今ぶし　芭蕉
一もとひふ多き根深大根　桐葉
そあーふ
馬をさく海もる雪の河ぶち　芭蕉
木の葉ふる炭俵吟おそし　雨水
はふくと横鍬音の名を著て　東藤

菊みの跡へうち加んや

桂男雪をいのちの宝哉

移一つも　芭蕉

みゝ〳〵あつてひまうてゝ

唐直に鏡も清し雪の朝

石〳〵と壺のすみ

寿きあうつな　桐葉

芭蕉

桐葉

着物ぬくへのほう時八橋のこと
根岸のことく切れもをわち綿入とて

雪の袖まし〳〵梅つむ別うな　桐葉

杉苔
〳〵

冬ごもりの一ト引鶏死ぬれもせず　東藤

みやこなる
武州秩父
梅林

梅白〳〵とみやこ鶴を追れ　芭蕉

杉苔よ寂すまる一ト雪　京秋風

我搦鮎割枇杷乃廣葉　秋風

なんようちく　やぶの　芒　芭蕉

日の毒　最綱の　氣を志ろて　湖春

山家

櫻の木の葉を掻の寒々郎

あるき七を　まち　もみつも　秋風

芭蕉

梅ちる日永一　湖春

東の家乃　鶯　棄　つく　芭蕉

業平中小蕨の　臭の並居て　同

旅店即興

ゆく春を　ちる　ちる　千鶴翁　同

二年を　ふく　古友よ　多し

令二月の中小活ち　櫻乃郎　同

雪薄し　鉋屑掃く　一寸　芭蕉

木芽を誘ふ　我もくるるとて　同

思ひ出も　来らや　柳　同

京の杖つく　祖の　まま麦　東藤

ふさひ熟睡を　破る　牡丹葉かな　芭蕉

牡丹葉かな　這ものの　名乗り

とかそよぐ　ひるの　ふくろ

うき人葉の　ふを　つゝ　一疎の　物うき　桐葉

笠着や　雨もる　窓も　春の雨　芭蕉

遠雷一時　同

笠もなき　顔を　風　かたむく　同

名月や　市堂の　鼾　江戸　其角

蚊屋の　外　仙化

雪や浪花の巣も郭公　曾良
商人も見うき初夜の月　文鱗
年一夜きてや別れの嵐雪　〃
蓬莱や住国のかなり指末山　杜国（ナコヤ）
出糸や磯見渡せば雲雀　長虹
夕ちは面よき風の姿なり　越人
秋のひやちらく動く水のと　荷兮
大方家ごとに這入る日より　夕道

降る帆のふくらに霧の一井
時鳥や志ほ蝉の山さそう　鼠弾
腹の時寺ごとに水　旦藁
萩枯く陣の羽を拾ひけり　東藤

元旦の亭より炉の面と
いふことを

埋火の南を吹けやまもくれ　其角
日く炉の西といふことを

雪のりや資中の酒泥む山　野水

秋の日乃仮そめあそび乱足哉　去来

森と宮我をあらそふ一夜や今の月　江戸　如行

歓喜の一よ宮こ乃郭　日　前川

蜀黍乃後をわたる夜時雨　荷兮

貧戸見せを連て歩りや茄子畑　重五

酒うけて勢ふ今年の下　長虹

熟田ふまうてん神の注連　江戸　当峰

わら灰のまくあるまて月ハうそ　日　奥児

雑ひ一てたる籠也軒の菊　曽良

手波乃まゝにきる白襲　越人

本當川の
ほとり

流れ来や籠のよし野郭公　文叶

蒜をうつ一輪よなりおなご　舟泉

あら牡ハ鹿うち後る入日哉　聽雪

正月も舞こゝ乃笠ぬぎ　羽笠

杜若水を中に八荅の乱

仮ごゝろに鶯物がたり　松芳

人うゑる畠の奥もあり　一里

霧深き笹に沿ひて清き水　卜信

尾陽昌圭のもとみその白せいまの集まや冻解て　露川

芭蕉

十二月九日一井亭興行

芭蕉

あし痕より雁の帰るを

尾さきへせもく　一井

ともやしくと筧をあふ茶焼く　越人

栗漬をこぶ沸葦あるこゝろ　昌碧

寒梅の莟乃ふくらを　荷兮

降ぬれて　楚竹

起もせてまた幻ふる白しおふる
乱れ髪一撫の行ぬくひ居る　東睡
あけくれ拾ふとりぼけるとりまよ　芭蕉
氣を飼るのみ我小僧　越人
麻布を織ひる紅葉して　昌碧
蘭を取こめる秋ぶ世話しき　荷兮
夕立の先よ雫する雷の声　楚竹
るもありぬ山陰の寺　東睡

小男鹿の子乳ふを離ふいつけまを　芭蕉
乳あるほどあいくちする身　越人
風すかしてかもけてふのあれ　荷兮
鳥ふ清く野ハ遠春り　昌碧

月雪の夢をあらそふ宵

宿とらで笑ふ也也雪の

月なるべく人の面をあてこする

雪ぞそらめつ暁の

時雨ぞ昨日一新りそむる

馬ぞ一六月雪しろ

ふや又小雨さへ降る秋の雪

十朗

東籬

春華

暁臺

文亟

三州岡城
趙鳥

方州

○

こぼるまで乃髪ぞ墨染

愛心の色なりけり

清の月望日秋

つもはなまよ

笑ふ山國小雪

出ぬ〳〵初冬や

のらくと柿一つ

白岡

五周

小上臺
文升之允

〃
美角

駿十

岡城
入素

暁臺

○

瀬ゝ之ゝ妹ゝ如ゝ今ゝ夜ゝ杉ゝ明
月滿て都ゝよゝのゝつゝくゝる　都貞
菖蒲ゝせ武門ゝ小ゝ靜ゝもゝ　磨三
忘れ花ゝわすゝ淺ゝ間ゝの夕ゝ　一来
葉のもゝ八百ゝまゝゝあゝんゝな　蕪博
舟路ゝゝふゝもゝ沖ゝ漕ゝ汐干狩　方布
なの月ゝ夜ゝゝ夜ゝのゝ深ゝゝゝゝ　岡城奥日
　五居

○

秋の江の舟ゝ傘ゝ干ゝ夕ゝ日ゝ哉　東蠭
花のやゝ淺ゝ小ゝ刀ゝ　越出雲崎以南
梅花ゝ實のゝ雫のやゝ蠶　十朝
もゝろゝ哉ゝゝゝ　萬岱
木下川ゝゝゝ蓴ゝ　岡城桃生
おゝゝゝ也ゝ搗ゝゝゝ　日周夢
ゝゝゝ活ゝゝ添ゝゝ春の夏　亞滿

○

秋の風窓を月こえて寒う郎　子東
神鳴くく櫛もけづらず　驌六
水鳥のこゑは川をこえ　麥甫
庵の籬や花の芳野の書さま　岡城六兎
相摸の山くく高く霜の原　矢作朱雁
人いまだ一葉涼しき閨の月　日魯佩
青梅や雨ある夜の中よひのこと　湖南呑溟

○

子欽つれもなき夜の浪音　宰馬
雪毒くく日の入て志賀の浦　琴宇
泥もうり叩きはしり時雨ぶ　奥信文蘭雅
竹の門つと出くく秋を見る　羅城
流星や越やすむらん夜の雨　岡城藻良
鷺の羽のうくくと着て月淋　口窪志
ひとり本よ筵うそこ一夜やさ　東垂

○

蔓しるく郭公清し　事紅

帯うちかもつて修行者　方竹

蓮うる徐（ヨモ）より風かをる　矢作　蕉尾

静さや雪の原行く駄のあと　奥信ま　南楚

あらそふ鴉の森の渡し舟　子東

秋の雨金屏深き山の中　桂眉

望やたそ月よ花よと歌まくら　白岡

○

蓮切てこの花流す水もあり　亜満

夕雲雨水れの浮入る蛍哉　入寿

水を汲よく活る春の古井戸　臥牛

磬一羽つくづくと人をあるめり　奥東折モ　旧車

世の田植ちさみよる揚なるも　旧浅香　露秀

降やがて雪よまるあるる涼しき　三州半垣村　水子貞

のこりなく立もくる日をみてき　都貞

○

秋酒ふ酌ふく庵ふや秋の市　卯史

同ふる〻落ちぶれ石蕗の毛　焦尾

色ふくて菊ふくひのふ白菊ふ　岡城

句を吹とまもる仏の閨　雪巣

薬の香も衆よふ人の閨　中垣内　姑半

星ふく粘土の牛ふ　岡城　亮路

唖蝉ふ三〻ふ句ふ〻あれや　春幸

○

夕ふ雲ふ雪ふあふれふ雷二日月　羅城

雲ふう〻ふふふふふむ　岡城　竹也

猛ふ人ふたふくふもふん本ふぎ　蟻冠

暑ふ来ふや北ふよふ心ふ　斗拙

日の朝や永住ふふふ王の夢　士訥

月晴ふ〻ふもふふふふ秋乃秋　烏雪

躍起て夕ふ立ふ芦ふ　子東

○

秋風や　春日小路の　鶏のあし　太芝坊

秋もまだ　うらもと葉ずり　以東

囲炉裏より　外薄うもの　小家かな　奥福島　蜀古

未の答　ありてもあるむ　余あり　帯梅

鹿の声　急雑炊　宵の　琴宇

更衣　ひとり笑ひの　坊　暁臺

有明や　白蒲英　春の　寥　寧馬

○

起き出て　雪を雨戸に　散らしけり　呑溟

岩梨や　野よりの文　一葉　朱雁

わら竹の　五六本もて　窓一葉　一葉

芦ふきて　雨よりぬ漏る　蕃洲

麥刈りて　あとや　江の　鯉　衆車

稗蒔て　畑こそ　多き　水　魯雄

文政元日の　朝　いそみ雨　麿二

○

茅舎いほよや一夜一夜に秋ふかし　暁臺

むかへ火も一口菊のつゆ　大作一女婦

蝶つくづく塘魂をとぢ日暮なり　李沛

ちるくと冷る日石のうつりかな　洛　貞雅

新米や小舟漕ちる初風雨　都貢

菊もみぢ茶筅の音も聞ゆらん　是山

茶のおとふるくも入しまきの山　事紅

○

夕月や池一まいの　梅の花　南河　南勢川崎

小さゝ一や細うみそのかいつぶり　澹洲

夕ぐもや江よ水の隠のみち　楚竹

降雪の果なくみえて日は暮る　真魯

面ほそ一新樹のあをの　飛なく　浩

茅舎ぬる夜もあるものあらし　逸漁

壁乃蔦その葉ちる海もあるらし　大津　酒通

○

一遊芳千代寺の冬籠へ

陰の日射をもとめても日の前　萬岱
笹うけて水も粧ふ軒の内　何大
雪の小春稽古の琴の音　文亟
景清忌一色や牡丹乃夕晴　趙堯
松ちり青苔咽をとゞめたる　晴珂
月冷神うつ雪の降出て雨見酒　一奎
　　曉臺

○

白菜乾うつ冬ごもりかな　栗津　重厚
秋の扉地を叩きてうつ夢乃うら　班鳩
細代うち拍ち面白き雪外　水口　貫志
降うつさゝみ乃月　白子　無曲
夜半紙て雨をかこつ女哉　大阪　画涼
落うつ机をかこす梅の宿　津　銀帒
毎年元原乃冲をうつ乃雨　飯田　蕉雨

坂本　千當
桐五　東甫
許風　尤露
湖南　樂二
馬涯

○

水洞て雪三尺乃深本ふか　葛巾
青嶂乃路杖ころくるゝ毎に　騏道
風や雪乃下ゆく毎の　赤澗冥　羅風
そのこゝろ毎ふうまをとる　洛　其成
切火ゝ事乃あるしらし　箕風
庵乃ぬくもりぬる　東武　成美
毎のあるものぬくもり　仙臺　巢居

飯貝まうさせ給ひて
さめぬまの
山ぢをそこゆるる
雪ふり
山ぢも
まよはぬ
まで
川

暁臺

来下さる
ものあり
大ぬさと
揃ふ
照給ふ
ものあり
或人神
て
ぬ
ぬ
ぬ

蕉門俳諧書林

京三条通寺町西江入ル

菊舎太兵衛